

『海なんて』

貴戸湊太

「海なんて、海なんて……!」

そう叫んで、俺は家を飛び出した。高校一年生の夏のことだ。

海に面したこの町では、誰もが海と一緒に生きている。潮風や波の具合で天気を読み、俺に教えてくれる両親。海で泳ごうと誘ってくれる友達。今日も海が綺麗だとあいさつしてくれるご近所さん。

でも、そんな当たり前からどうしようもなく逃げ出したくなった。どうしてもそう思ったのか、自分でもはつきりとは分らない。ただ、日に日にこの町から——海から離れたくなかった。

電車を乗り継ぎ、予約をした街中のビジネスホテルに泊まった。海存在を一切感じられない都会だ。新鮮でわくわくした。

だがその夜、なかなか眠ることができなかった。どうしても落ち着かない。いつの間にか、

波の奏^{かな}でるリズムを求めてしまっていた。

焦^{あせ}って布団をかぶり直す。しかし眠りは訪れなかった。

代わりに思い出したのは、幼い日の出来事だった。旅行で都会に行った時、俺は夜にぐずり続けた。

『潮の匂いがしない、波の音が聞こえない』

そう言って。

まだ子供だったから。そう思っていた。でも、そうじゃなかったのかもしれない。

そしてぐずる俺に、母はこう語りかけたのだった。

『それだけ、海が大好きなんだね』

翌朝、俺は来た時と同じように電車で飛び乗り、海に面したあの町へと引き返した。

地元の駅で降りると、潮風が頬を撫^なでた。海鳥が声を揃^{そろ}えて鳴いている。いつもの見慣れた風景だった。

「海なんて……」

そうつぶやき、俺は目元を拭^{ぬぐ}った。もちろん泣いたわけじゃない。ただ、潮風が目染みただけだ。